

大学生における親の期待に対する反応様式に関する研究

今林 俊一*, 野田百合香**, 迫田 孝志***

A Study on Reactions to Parental Expectations among Undergraduate Students

Shunichi Imabayashi*, Yurika Noda** and Takashi Sakoda***

本研究では、大学生の時間的展望と親の期待に対する反応様式の関係について明らかにする。大学生197名の時間的展望の特徴を明らかにするためクラスター分析を行った結果、現在高群、無関心群、展望高群、展望低群の4つの群が見出された。

親から期待を感じている151名の時間的展望の特徴（4群）とその反応様式について検討した結果、展望高群では、「親の期待への反発・負担感」、「親の期待への表面的な迎合」は低く、「自分の生き方の尊重」、「親の期待との折り合い」が高かった。一方、展望低群では、「自分の生き方の尊重」、「親の期待との折り合い」は低く、「親の期待への反発・負担感」、「親の期待への表面的な迎合」が高いという対照的な結果であった。現在高群では、「親の期待との折り合い」は高く、「親の期待への反発・負担感」と「自分の生き方の尊重」が低かった。また、無関心群では、「自分の生き方の尊重」は低い一方、「親の期待への表面的な迎合」が高く、期待に対しても無関心であることがうかがえた。

Key Words : [時間的展望][親の期待への反応様式][クラスター分析][大学生]

(Received September 26 2022)

問題と目的

青年期における親子関係

青年期における発達課題のひとつとして、子の親からの自立があげられる。ホリングワース(Hollingsworth)は、青年の心理的自立を「心理的離乳」(psychological weaning)とよび、12歳から20歳までのすべての青年に「家族の監督から離れ、一人の独立した人間になろうとする衝動」があらわれるとした。このように、青年は自立(自律)を要請される反面、社会的、経済的、ひいては心理的には親に依存しなくてはならないアンビバレンツな存在でもあるといえる(仲野・桜本, 2005)。

青年期の対人関係においては、心理的離乳といった概念からもわかるように、親子関係よりもむしろ友人関係や異性関係の方に関心の重点が移行すると考えられる。しかしながら、実際には青年期における親と子の関係が希薄化するというのではなく、親と子の関係はその基底に

* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科こども学専攻(〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

** 元 鹿児島大学教育学部

*** 鹿児島大学大学院教育学研究科(教職大学院)(〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目20番6号)

において継続する(小高, 1998)。このことから, 青年期における親との関係や親からの影響は依然として無視できないものがあり, 青年にとって自立(自律)とそれに伴う親との関係の再構築は重要な課題のひとつであると考えられる。

青年期におけるアイデンティティ・時間的展望

また, 青年期における自我と自己の発達を考えるうえで, エリクソンによって提唱されたアイデンティティ(自我同一性)がある。アイデンティティとは, 幼児期以来形成されてきた様々な同一化や自己像が, 青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する, 自我の統合された状態である(杉村, 2001)。アイデンティティの形成は, 青年期に特に問題となるものであり, 青年期の自我と自己の発達を考えるうえでは欠かせないものといえる。つまり, アイデンティティは, 社会的現実の中で自我の一部として機能するもので, これまで自分がもっていた様々な自己の表象を検討し, 統合するものだけということができる(谷, 2014)。

アイデンティティ確立の一側面, または基礎とされていることに時間的展望がある。これまでに, アイデンティティの問題は, 時間的展望における過去・現在・未来がどのように関連しているかについての問題ともかかわっているということが報告されている。レヴィン(Lewin, 1979)によれば, 時間的展望は「ある一定の時点における個人の心理学的過去と未来についての見解の総体」と定義されている。都築(2014)は, 個人が経験してきた過去の出来事やこれから経験していくと考えられる未来の出来事の全体が, その人の時間的展望を構成しており, 過去は現在の視点から問い直され, 過去を意味づけることによって未来を構想し, 未来を構想することによって現在を方向づけるものであると論じている。

時間的展望の研究には主に, ①将来についての展望の広がり, 密度, 内容に関する研究と, ②過去・現在・未来がどのように関連しているかについての研究の大きく分けて2つの方向がある。アイデンティティの問題は, とくに後者の②過去・現在・未来がどのように関連しているか, すなわち, 過去, 現在, 未来の連続性の感覚, それらが関連性をもってとらえられ, 統合されているか, という問題と関わっていると考えられている(都築・白井, 2007)。

富安(1997)は, 大学生において, 未来指向的で, 未来イメージが明るく, 過去・現在・未来を統合的にとらえているほど進路決定自己効力の高いことを報告している。また, 日潟・齊藤(2007)は, 高校生・大学生ともに, 過去・現在・未来に対してポジティブな態度を示している者は精神的健康度が高く, このような青年は, 過去・現在・未来の出来事をバランスよく想起していることを明らかにしている。さらに, 日潟(2008)は, 大学生を対象に, サークル・テストを通して過去・現在・未来を統合して描いる「包含」は, それらをすべて離して描いている「原子」に比べ精神的健康度の高いことを明らかにし, 過去の出来事をとらえ直して意味づけることによって, 未来への指向性が生まれてくるのではないかと述べている。嶋野・菅原・大波(2003)では, 将来に希望や目標を持ち, 将来への見通しを立てられる者は, 様々な状況に対応でき, 人とのコミュニケーションが上手くとれ, 積極的に人と関わっていることが報告されている。これらの研究から, 過去・現在・未来という時間を統合し, ポジティブな態度をもつことは, 大学生の進路選択や精神的健康, 他者との関わりにおいても重要であると考えられる。

また、植之原（1993）は、大学生におけるアイデンティティ地位の達成群は非達成群とは異なり、過去経験の記憶が忠実な記憶というよりも現在によく統合された記憶であることを明らかにしている。その上で、青年期の同一性達成のためには、過去における事実の記憶を参照したり、新たに意味づけたりすることが求められており、過去を捉え直し、肯定的に現在や未来を展望することは、青年期において非常に重要な要素であると述べている。

これらの研究では、大学生の時間的展望は未来志向的であることが指摘されており（都筑, 1999）、時間的展望における未来の側面に注目した研究が多くみられる。その中で、大学生の精神的健康やアイデンティティ達成では過去・現在・未来をバランスよく想起していることや（日湯・齊藤, 2007；日湯2008）、過去を統合し現在や未来を展望することが重要であることが示唆されている（植之原, 1993）点からは、過去・現在・未来という複数の側面から時間的展望について検討すべきことが重要であるといえよう。

近年、時間的展望は、他者の影響を受けることや、他者という要因を組み込んで研究を行う必要性があることが指摘されている（都筑・白井, 2007）。石川（2011）は、時間的展望に他者という要因を組み込んで、過去の捉え方及び目標意識から捉える時間的展望と他者の影響の認識についての関連を検討している。その結果、①過去を否定的にとらえ、将来への希望をもてず、現在において空虚感を感じることは、他者とのかかわりの中で否定的感情を感じることと関連していること、②過去を受容し、現在や未来と連続するものとしてとらえることや将来に希望と目標をもつこと、現在において空虚感を感じないことは、他者との関わりから肯定的な効果を感じていることを明らかにしている。これらのことから、他者の影響の認識と時間的展望には関連があると考えられる。

親の期待が子どもに与える影響に関する研究

ところで、親が子どもに期待する領域について、庄司・藤田（2000）は、子どもから見た親の期待として、大学生に対して中学生の頃の親の養育態度を回想させ、「人間的成長」、「社会・経済的地位達成」、「よい子」、「結婚・家庭生活」、「社会貢献」、「健康性」、「身体的活動」、「友人関係」、「進学・学歴」の9領域を抽出している。また、河村（2003）は、親からの期待について高校生に対して質問紙調査を行い、「進学・学業期待」、「社会への適応期待」、「就職期待」、「従順・見栄期待」、「苦勞への報い期待」の5因子構造を明らかにしている。さらに、富澤（2005）では、大学生と専門学生に対して質問紙調査を行い、親から受ける期待として「社会的スキルの習得」、「就職・学業期待」、「学校への適応」という3因子が得られている。

また、春日・宇都宮（2011）は大学生に対して質問紙調査を行い、親からの期待について「人間性期待」と「教育・就職期待」の2因子構造を見いだしている。「人間性期待」は「励み」に、「教育・就職期待」は「重荷」にそれぞれ正の関連が認められ、親の期待を肯定的に捉え、応えようと行動することが自尊感情を高めることを明らかにしている。庄司・藤田（2000）は、「子どもから見た親の期待」は子どもの「自己実現」および「社会的評価」という2つの側面から大きくは捉えられるとし、親の養育態度との関連を検討した。その結果、親の「情緒的支持」は「自己実現」には正の影響を与える一方、「社会的評価」には負の影響を与えており、親の「情緒的支持」が子どもに対して複雑な影響を与えることが示されている。このように親からの期

待は、子どものパーソナリティや学業の目標、進学や職業選択、自尊感情など様々な側面に対して影響を与えることが示されている。

さらに、池田(2009)は、大学生における親の期待に対する反応様式を明らかにするために、親から子どもへの期待や要求に対して感じていることや考えていること、期待や要求に対する対応や行動についての記述を求める質問紙調査を行っている。その結果、「親の期待の積極的受容」、「親の期待への反発」、「親の期待との折り合い」、「自分の生き方の尊重」、「親の期待の軽視」、「親の期待への表面的な迎合」、「親の期待に応えることへの限界の認識」、「親の期待による負担感」という8つを親の期待に対する反応様式として抽出している。

仲野・桜本(2005)は、大学生の親からの期待に対する意識及び受容態度とアイデンティティ形成との関連を検討し、「期待を肯定的に受容している人間は、アイデンティティ形成も促進される傾向がある」と報告している。池田(2009)は、大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティ感覚との関係について検討し、男女ともに親からの期待を感じている程度が強いほど、期待による負担感を示す程度が大きいということ、また、アイデンティティの感覚が確かであるほど、親の期待に対して負担感や反発を示す程度は小さくなり、親の期待との折り合いをつけ自分の生き方を尊重しているということを明らかにしている。そして、心理的に独立を求める時期でもある青年期における親からの期待との向き合い方について、青年期後期の親の期待に対する反応様式としては、親の期待に対して負担感や反発を示すのみではなく、親の期待との折り合いをつけ、自分の生き方を尊重していくことでもあると指摘している。このように、親の期待が子どもに与える影響については、肯定的な影響と否定的な影響の両方の側面のあることが多くの研究により指摘されており、青年が親からの期待とどのように向き合っているかは重要であると考えられよう。

これらの一連の研究から、まず、過去・現在・未来という時間を統合し、時間的展望を確立することは、大学生の進路選択や精神的健康という点からみても重要であると考えられる。

次に、他者との関わりにおいても時間的展望の確立は重要であるということが示唆されている。将来に希望や目標を持ち、将来への見通しを立てられる者は、さまざまな状況に対応でき、人とのコミュニケーションがうまくとれ、積極的に人と関わっていること(嶋野・菅原・大波, 2003)、また、時間的展望と他者の影響の認識について、①過去を否定的にとらえ、将来への希望をもてず、現在において空虚感を感じることは、他者とのかかわりの中で否定的感情を感じることに関連しているということ、②過去を受容し、現在や未来と連続するものとしてとらえることや将来に希望と目標をもつこと、現在において空虚感を感じないことは、他者との関わりから肯定的な効果を感じていることに関連しているということ(石川, 2011)を明らかにしている。このように、時間的展望は、他者の影響を受けることや、他者という要因を組み込んで研究を行う必要性のあることが指摘されており(都筑・白井, 2007)、都筑(2014)は、「この人になりたい」という人間の存在が青年の希望の形成に寄与すると指摘している。富安(1997)や嶋野・菅原・大波(2003)、石川(2011)の研究も踏まえると、時間的展望のもち方が他者との関わりや進路決定などに影響を及ぼす可能性が考えられる。

さらに、進路選択や職業選択が身近な問題として存在している青年期後期の大学生において、親との関係のあり方や親からの期待は意識されやすくなる時期である。職業選択・決定の過程

では、自らの希望や価値観だけでなく、親が抱いている価値観、親の期待、あるいは評価なども影響を与えることから（長峰，2003）、親からの期待とどのように向き合い自己を確立していくかは、重要な課題であると考えられる。これについて池田（2009）は、親の期待について、期待に対する反応様式とアイデンティティとの関係について検討し、アイデンティティの感覚が確かであるほど、親の期待に対して負担感や反発を示すのではなく、親の期待との折り合いをつけ自分の生き方を尊重するというような反応様式を示すことを明らかにしている。日潟（2008）は、現実的な進路選択が直前に迫り、モラトリアムの仕上げの時期として自己の方向性を考えるうえで時間の統合が必要であり、それができるか否かが大学生の重要な課題であると指摘している。そして、親からの期待と向き合い自己を確立していくうえで、アイデンティティ感覚の確かさが重要であることを指摘している。これらを踏まえると、アイデンティティ確立の一側面または基礎とされる時間的展望の確立も、親からの期待と向き合い自己を確立していくうえで重要な側面を担っているのではないかと考えられるが、その関係について検討した研究はあまり見受けられない。

このように、自己を確立し、親の期待という基準を問い直す時期にある大学生に焦点を当て、親の期待に対する反応様式について時間的展望の確立という点から検討することは有意義であると考えられる。具体的には、親から自立し、自己を確立していくうえで、「親の期待とどう向き合うか」という点について時間的展望の確立という視点から考えると、過去・現在・未来に対してポジティブな時間的展望をもつ展望高群は、アイデンティティが確立していると考えられるため、期待を感じても、親の考えと折り合いをつけつつ、自分の生き方の尊重というような反応様式を示すのではないかと考えられる。一方で、過去・現在・未来に対してネガティブな時間的展望をもつ展望低群は、アイデンティティが未確立であると考えられるため、折り合いをつけ自分の生き方の尊重を示す程度は低く、反対に、期待に対する反発や負担感といった反応様式を示すのではないかと考えられる。

そこで本研究では、時間的展望の確立の状態により親の期待に対する反応様式は異なるのではないかと想定し、時間的展望のもち方と親の期待に対する反応様式の関係について明らかにすることを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

大学生197名（男子79名，女子118名，19-23歳，平均年齢20.17歳，SD=0.83）

調査にあたり、調査内容を説明し回答への協力を依頼すると共に、個人情報保護を遵守することや分析結果の公表について了承の得られた197名を調査対象者とした。

2. 実施時期

2015年7月下旬～11月上旬に、質問紙調査を実施した。

3. 調査内容

(1) フェイスシート

調査対象者の属性について調べるため、性別、学年、年齢について尋ねた。

(2) 時間的展望の測定：時間的展望体験尺度（18項目5件法）

白井（1994）が作成したものをを用いた。「過去受容」（4項目）,「現在充実」（5項目）,「目標指向性」（5項目）,「希望」（4項目）の4つの下位尺度からなる。「とても当てはまる（5点）」,「どちらかといえばあてはまる（4点）」,「どちらともいえない（3点）」,「どちらかといえばあてはまらない（2点）」,「全くあてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。逆転項目については補正して得点を与えた。

(3) 親の期待を感じる程度を尋ねる1項目（1項目4件法）

池田（2009）が作成したものをを用いた。具体的には,“あなたは,普段「こうあってほしい」あるいは「こうなってほしい」というように親から期待されているとどのくらい感じていますか”という質問に,「全く感じていない（1点）」,「どちらかといえば感じている（2点）」,「感じている（3点）」,「非常に感じている（4点）」の4件法で回答を求めた。

(4) 親の期待に対する反応様式を尋ねる63項目（63項目5件法）

池田（2009）が作成したものをを用いた。(3)の質問で,親の期待を「全く感じていない」と回答した調査対象者を除いて,親の期待に対する反応様式を尋ねる63項目に回答を求めた。「全くあてはまらない（1点）」,「あまりあてはまらない（2点）」,「どちらともいえない（3点）」,「ややあてはまる（4点）」,「非常にあてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。

結 果

時間的展望体験尺度の因子分析

時間的展望体験尺度18項目について,固有値を1に設定して因子分析を行った（重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転）。なお,本分析では統計解析ソフトウェアSPSS Statistics19.0を用いた。結果から4因子解が妥当と判断し,因子数を4にして再度因子分析を行った（重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転）。その結果,因子負荷量が.40に満たない3項目を除外し,4因子15項目が抽出され,累積寄与率は49.09%であった。因子分析の結果をTable 1に示す。第1因子は8項目で構成されており,「私には,だいたいの将来計画がある」,「私には,将来の目標がある」など,未来や希望に関する内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで「未来指向性」と命名した。第2因子は3項目で構成されており,「私の過去はつらいことばかりだった」,「過去のことはあまり思い出したくない」など過去の受け止め方に関する内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで「過去受容」と命名した。第3因子は2項目で構成されており,「今の生活に満足している」,「毎日の生活が充実している」といった,現在の充実感に関する内容の項目に高い負荷量を示した。そこで「現在充実」と命名した。第4因子は2項目で構成されており,「毎日が同じことのくり返しで退屈だ」,「毎日がなんとなく過ぎていく」といった現在の毎日の実感に関する内容の項目に高い負荷量を示した。そこで「現実感」と命名した。

次に,各因子の内的整合性について検討するために,因子ごとにCronbachの α 係数を算出したところ,「未来指向性」因子 ($\alpha = .84$),「過去受容」因子 ($\alpha = .68$),「現在充実」因子 ($\alpha = .72$),「現実感」因子 ($\alpha = .70$) と,概ね良好な内的整合性を有していることが確認された。

なお、逆転項目は補正して得点を与えているため、「未来指向性」因子、「過去受容」因子、「現在充実」因子、「現実感」因子は、それぞれ得点が高いほど肯定的な時間的展望があることを示す。

Table 1 時間的展望体験尺度の因子分析結果および項目ごとの平均値と標準偏差

項目内容	F1	F2	F3	F4	M	SD
1 未来指向性 ($\alpha = .84$)						
6.私には、だいたいの将来計画がある	.87	.17	-.08	.01	3.62	1.04
7.私には、将来の目標がある	.80	.06	-.03	-.07	3.97	0.98
8.私の将来は漠然としていてつかみどころがない*	-.65	.16	.24	.17	2.87	1.21
17.私の将来には、希望がもてる	.64	-.05	.25	.17	3.42	1.01
9.将来のために考えて今から準備していることがある	.53	.09	.18	.06	3.35	1.02
18.将来のことはあまり考えたくない*	-.51	.11	.03	.18	2.60	1.14
16.自分の将来は自分できりひらく自信がある	.50	-.09	.24	.27	3.42	0.99
10.10年後、私はどうなっているのかよくわからない*	-.45	.06	.08	.16	3.67	1.14
2 過去受容 ($\alpha = .68$)						
12.私の過去はつらいことばかりだった*	.08	.87	-.07	-.08	2.32	1.06
11.過去のことはあまり思い出したくない*	.00	.70	.08	.00	2.99	1.28
13.私は過去の出来事にこだわっている*	-.04	.41	-.07	.13	2.46	1.15
3 現在充実 ($\alpha = .72$)						
3.今の生活に満足している	-.07	.00	.81	-.15	3.49	1.00
1.毎日の生活が充実している	.07	-.01	.56	-.23	3.97	0.82
4 現実感 ($\alpha = .70$)						
2.毎日が同じことのくり返しで退屈だ*	-.07	-.01	-.08	.72	2.65	1.13
4.毎日がなんとなく過ぎていく*	.02	-.01	-.27	.62	3.26	1.16
因子間相関						
F1	—					
F2	-.34	—				
F3	.36	-.35	—			
F4	-.23	.27	-.14	—		

注1. *は逆転項目を示す。

時間展望体験尺度の下位尺度について

時間的展望体験尺度の4つの因子について、各因子を表す尺度得点を構成した。各下位尺度の尺度得点は、粗点の合計得点を項目数で除したものを当てることとし、「未来指向性」下位尺度得点 (M=3.33, SD=0.73), 「過去受容」下位尺度得点 (M=3.41, SD=0.91), 「現在充実」下位尺度得点 (M=3.73, SD=0.81), 「現実感」下位尺度得点 (M=3.04, SD=1.00) とした。

次に、時間展望体験尺度の下位尺度間相関を求めた。結果をTable 2に示す。4つの下位尺度は弱い正の相関しか示さなかった。

Table 2 時間展望体験尺度の下位尺度間相関と平均値および標準偏差

	未来指向性	過去受容	現在充実	現実感	M	SD
未来指向性	—	.29**	.32**	.28**	3.33	0.73
過去受容		—	.29**	.25**	3.41	0.91
現在充実			—	.38**	3.73	0.81
現実感				—	3.04	1.00

** $p < .01$

時間的展望体験尺度の男女差の検討

時間的展望体験尺度の4つの各下位尺度得点について男女差の検討を行うために、t検定を行った。その結果、現在充実 ($t(195) = -1.95, p < .10$) について男女の得点差に有意な傾向がみられ、女性の方が男性に比べ有意に高い得点を示す傾向がみられた。しかし、未来指向性 ($t(195) = 0.52, n. s.$)、過去受容 ($t(195) = 0.73, n. s.$)、現実感 ($t(195) = -0.60, n. s.$) については、男女の得点差は有意ではなかった (Table 3)。現在充実において、男女差に有意な傾向は見られたものの、明確な有意差はみられなかった。そのため、以後の分析においては男女合わせて検討を行った。

Table 3 時間的展望体験尺度における男女別の平均値と標準偏差およびt検定の結果

	男性		女性		t 値
	M	SD	M	SD	
未来指向性	3.36	0.77	3.31	0.71	0.52
過去受容	3.46	0.99	3.37	0.85	0.73
現在充実	3.59	0.87	3.82	0.75	-1.95 ⁺
現実感	2.99	1.07	3.08	0.96	-0.60

⁺ $p < .10$

時間的展望体験尺度のクラスター分析

時間的展望の各被験者の下位尺度得点をもとにクラスター分析 (Ward法) を行い、過去、現在、未来に対する態度から解釈可能であった4群を採用し4群による分析を行った (Figure 1)。各群の特徴から、1群を「現在高群」(n = 52)、2群を「無関心群」(n = 61)、3群を「展望高群」(n = 47)、4群を「展望低群」(n = 37) とした。

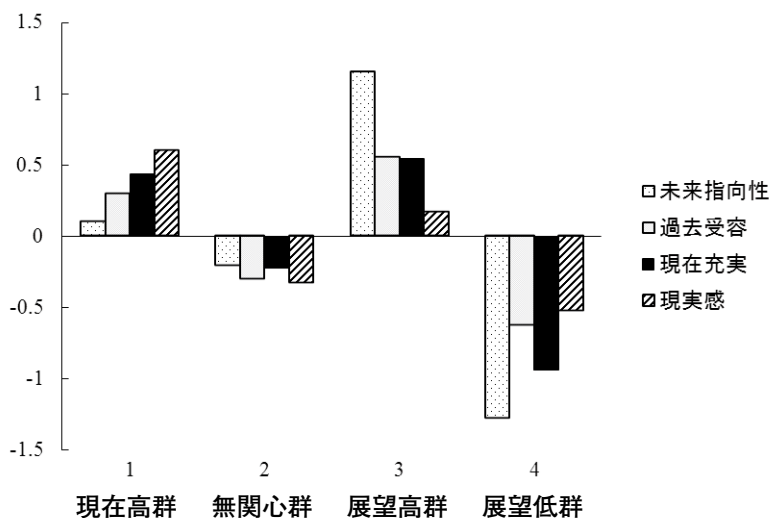


Figure 1 時間的展望のクラスター分析によるグループ分け

期待に対する反応様式の集計

親の期待を感じている程度と性別によるクロス集計表を作成し、親の期待を感じている大学生の割合を確認した (Table 4)。その結果、大学生の男性では79名中23名 (29.1%) が、女性では118名中23名 (19.5%) が親の期待を「全く感じていない」と回答していることが明らかとなった。

Table 4 親の期待を感じている割合

	全く 感じていない	どちらかといえば 感じている	感じている	非常に 感じている	合計
男性	23 (29.1)	32 (40.5)	21 (26.6)	3 (3.8)	79 (100.0)
女性	23 (19.5)	45 (38.5)	40 (34.2)	10 (8.5)	118 (100.0)
全体	46 (23.4)	77 (39.1)	61 (31.0)	13 (6.6)	197 (100.0)

注2. 数字の上段は人数, 下段は性別ごとの人数比 (%) である。

親の期待に対する反応様式尺度の因子分析

親の期待を「全く感じていない」と回答した大学生46名を除いた151名による親の期待に対する反応様式を尋ねる63項目について因子分析を行った(重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転)。固有値1以上を基準に抽出した結果、6因子解が妥当と判断し、因子数を6にして再度因子分析を行った(重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転)。その結果、因子負荷量が.40に満たない項目および2項目以上にわたり.40以上の負荷量を示す11項目を除外し、6因子52項目が抽出され、累積寄与率は50.55%であった。因子分析の結果をTable 5に示す。第1因子は17項目で構成されており、「親の期待があるから、自分がんばれると思う」、「親の期待のおかげでがんばろうと思える」など、親の期待を励みに感じ、受容する内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで、「親の期待の積極的受容」と命名した。第2因子は11項目で構成されており、「親の期待を窮屈に感じる」、「親には自分を放っておいてほしいと思う」など、親の期待に反発感や負担感を抱く内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで、「親の期待への反発・負担感」と命名した。第3因子は10項目で構成されており、「自分の意思で、自分の生き方を決めようと思う」、「自分のことは自分で決断しようと思う」など、自らの意志を尊重する内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで、「自分の生き方の尊重」と命名した。第4因子は6項目で構成されており、「親の意見を全て受け入れることはできないと思う」、「親の期待に応えたくないと思う」など、親の期待に対して限界を感じる内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで、「親の期待への限界の認識」と命名した。第5因子は5項目で構成されており、「自分の考えを話して、親に分かってもらおうとする」、「親の意見を聞きつつ、自分の意見も聞いてもらう」など、親との意見や考え方の違いに折り合いをつける内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで、「親の期待との折り合い」と命名した。第6因子は3項目で構成されており、「親が見ている前では、親の望んでいるようにふるまう」、「親の前ではいい子にしている」など、親の期待に表面的に沿う内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで、「親の期待へ

Table 5 親の期待に対する反応様式の因子分析結果および項目ごとの平均値と標準偏差

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6	M	SD
1 親の期待の積極的受容 ($\alpha = .91$)								
13.親の期待があるから、自分がんばれると思う	.76	-.13	.05	.22	.01	-.14	3.19	1.09
44.親の期待のおかげでがんばろうと思える	.76	-.10	.23	.29	-.07	-.09	3.32	1.12
53.親に期待されると、自分はしっかりしなければならぬと感じる	.69	-.09	.18	-.02	-.11	.16	3.33	0.99
25.できるだけ親の期待に沿いたいと思う	.69	.18	-.12	-.16	-.05	.06	3.15	1.02
49.親の期待を裏切りたくないと思う	.69	.01	.13	-.19	-.05	.10	3.48	0.99
12.親の期待を励みに感じる	.68	-.21	.18	.08	.07	-.08	3.52	1.04
11.親の期待に応えられるようにがんばる	.67	-.01	.06	-.18	.03	.08	3.52	0.96
63.親から期待されることをうれしく感じる	.61	-.20	.08	-.03	.06	-.08	3.52	1.01
42.親が期待してくれることに感謝している	.58	-.25	.18	.10	.04	-.09	3.63	0.99
62.親の期待するとおりにがんばらなければいけない気がする	.58	.11	-.09	.03	-.07	.20	2.60	1.05
29.親に応援されているのだからがんばろうと思える	.57	-.10	.01	.14	.11	.13	3.58	1.04
22.なるべく親の期待に応えようと思う	.55	.15	-.21	-.26	-.06	.04	3.29	1.01
31.親に期待されることは仕方ないので、とにかくがんばろうと思う	.53	.23	.03	.02	.04	-.07	3.23	0.90
61.親の言うとおりに行動する	.50	.30	-.18	.20	-.08	.11	2.37	0.96
60.親の期待に沿わなければ、という責任を感じる	.46	.26	-.23	.12	.02	.09	2.67	1.05
30.親の言うことはもっともなので、期待に沿うようにしようと思う	.45	.07	-.25	.32	.19	.03	2.82	0.92
1.自分の考えだけではなく、親の考えにも耳を傾ける	.40	.21	-.12	-.15	.29	.04	3.90	0.80
2 親の期待への反発・負担感 ($\alpha = .91$)								
34.親の期待を窮屈に感じる	.19	.91	.05	-.06	-.09	-.17	2.77	1.14
46.親には自分を放っておいてほしいと思う	-.15	.85	-.04	-.02	.14	-.03	2.70	1.11
33.親の意見に反発したくなる	.21	.82	.09	.06	.07	-.21	3.14	1.09
45.親の価値観に疑問を感じる	.04	.72	.11	.02	-.12	-.05	2.64	1.10
2.親の考え方が嫌になる	.09	.71	.08	-.12	-.13	.00	2.84	1.14
48.親には自分のことに干渉しないでほしいと思う	-.18	.70	-.02	-.04	.06	-.05	2.81	1.07
37.親からの期待をプレッシャーに感じる	.20	.66	-.25	-.26	.08	-.12	2.64	1.09
18.親の期待を重荷に感じる	.09	.61	-.01	.05	-.04	.25	2.38	1.16
4.親が自分のことに意見を言うのはうっとうしいと思う	-.16	.53	.21	-.01	-.20	.13	2.87	1.17
59.親の意見を無視する	.06	.52	.07	.34	-.10	-.22	2.03	0.96
41.親の意見を聞いたふりをする	-.06	.42	.13	.38	.08	.19	2.47	0.94
3 自分の生き方の尊重 ($\alpha = .86$)								
10.自分の意思で、自分の生き方を決めようと思う	.15	.08	.80	-.17	-.06	-.07	4.10	0.78
9.自分のことは自分で決断しようと思う	.12	.04	.74	-.23	-.09	.06	3.99	0.89
24.親の期待より、自分の意見を優先しようと思う	.02	.04	.70	-.01	-.11	-.06	3.57	0.84
40.本当に自分のやりたいことを見出そうと思う	.15	-.05	.69	-.13	.14	.02	4.09	0.75
50.自分がしたいことをしようと思う	.09	.09	.61	-.25	.07	-.18	4.02	0.74
43.親の意見も考慮しながら、最終的には自分で決定しようとする	.16	-.11	.60	-.14	.14	.01	4.26	0.72
8.親の話は聞かずに聞いて、実際は自分の思うとおりに行動する	-.10	-.18	.57	.07	.04	.18	3.19	1.01
26.親の考えに振り回されずに、自由に行動しようと思う	-.11	.14	.57	.10	.07	.13	3.36	0.84
15.親の期待を気にしていても仕方がないので、できることをやろうと思う	-.28	.01	.48	.10	.10	.12	3.50	0.97
6.自分が納得できないことは、親のいないところでは守らない	.03	-.08	.41	.09	-.23	.33	3.15	1.07
4 親の期待への限界の認識 ($\alpha = .70$)								
51.親の意見を全て受け入れることはできないと思う	-.08	.14	.21	-.66	.05	.05	3.95	0.89
17.親の期待に応えたくないと思う	-.18	.30	.04	.61	-.01	-.06	1.93	0.86
47.親の考えと自分の考えがくいちがうことがあるのは当然だと思う	-.06	.16	.23	-.56	.11	-.04	4.15	0.73
16.親が望むようには行動しない	-.26	.27	.23	.47	.08	.04	2.40	0.96
7.親の言うとおりにしていれば間違いないと思う	.20	-.03	-.28	.42	.10	.23	2.11	0.92
35.親の期待に応えることに限界があるのは当然だと思う	-.08	.13	.32	-.41	.11	.15	4.11	0.73
5 親の期待との折り合い ($\alpha = .80$)								
56.自分の考えを話して、親に分かってもらおうとする	-.02	-.05	.12	-.08	.70	.04	3.79	0.92
14.親の意見を聞きつつ、自分の意見も聞いてもらう	.05	-.04	.07	-.11	.70	.12	4.03	0.77
32.自分の意見を親にしっかりと伝える	.00	-.05	.05	-.07	.66	-.14	3.82	1.04
27.親と自分の意見が異なるときは、話し合いをしてお互いの考えを理解しようとする	.06	-.11	-.11	.05	.64	.00	3.51	1.03
55.親を説得して、自分のやりたいことをする	.03	.05	.39	.03	.43	-.06	3.43	0.95
6 親の期待への表面的な迎合 ($\alpha = .82$)								
23.親が見ている前では、親の望んでいるようにふるまう	.09	-.11	-.01	-.11	.04	.93	2.68	1.07
28.親の前ではいい子にしている	.12	-.18	.08	-.02	.00	.89	2.72	1.10
39.表面的には親の言うとおりにする	.08	.18	.00	.08	-.01	.57	2.60	0.97
因子間相関								
F1	—							
F2	-.36	—						
F3	-.22	.00	—					
F4	-.07	.18	-.04	—				
F5	.39	-.44	.21	-.19	—			
F6	.11	.53	-.17	.20	-.25	—		

の表面的な迎合」とそれぞれ命名した。

次に、各因子の内的整合性について検討するために、因子ごとにCronbachの α 係数を算出したところ、「親の期待の積極的受容」因子 ($\alpha = .91$)、「親の期待への反発・負担感」因子 ($\alpha = .91$)、「自分の生き方の尊重」因子 ($\alpha = .86$)、「親の期待への限界の認識」因子 ($\alpha = .70$)、

「親の期待との折り合い」因子 ($\alpha = .80$), 「親の期待への表面的な迎合」因子 ($\alpha = .82$) と、十分な内的整合性を有していることが確認された。

親の期待に対する反応様式尺度の男女差の検討

親の期待に対する反応様式の6つの各下位尺度得点について男女差の検討を行うために、 t 検定を行った。その結果、「親の期待の積極的受容」($t(149) = -1.38, n. s.$), 「親の期待への反発・負担感」($t(149) = -0.40, n. s.$), 「自分の生き方の尊重」($t(149) = 1.12, n. s.$), 「親の期待への限界の認識」($t(149) = -1.01, n. s.$), 「親の期待との折り合い」($t(149) = -1.31, n. s.$), 「親の期待への表面的な迎合」($t(149) = -1.56, n. s.$) のいずれにおいても、男女の得点差は有意ではなかった (Table 6)。そのため、反応様式の分析においては男女合わせて検討を行った。

Table 6 親の期待に対する反応様式における男女別の平均値と標準偏差および t 検定の結果

	男性		女性		t 値
	M	SD	M	SD	
親の期待の積極的受容	3.15	0.62	3.30	0.63	-1.38
親の期待への反発・負担感	2.63	0.78	2.68	0.78	-0.40
自分の生き方の尊重	3.79	0.56	3.68	0.56	1.12
親の期待への限界の認識	3.07	0.39	3.13	0.35	-1.01
親の期待との折り合い	3.62	0.65	3.77	0.74	-1.31
親の期待への表面的な迎合	2.52	0.92	2.75	0.88	-1.56

時間的展望の各グループにおける親の期待に対する反応様式の分散分析

時間的展望体験尺度の下位尺度得点を標準化したクラスター分析 (Ward法) による「現在高群」($n = 42$), 「無関心群」($n = 46$), 「展望高群」($n = 38$), 「展望低群」($n = 25$) の4群を独立変数、親の期待に対する反応様式尺度を従属変数として分散分析を行ったところ、「親の期待への反発・負担感」($F(3, 147) = 7.54, p < .001$), 「自分の生き方の尊重」($F(3, 147) = 7.20, p < .001$), 「親の期待との折り合い」($F(3, 147) = 6.69, p < .001$), 「親の期待への表面的な迎合」($F(3, 147) = 4.42, p < .01$) の4つで主効果が見られた。結果をTable 7に示す。多重比較 (Tukey法) を行った結果、「親の期待への反発・負担感」では、「現在高群」「展望高群」に比べ、「展望低群」が高いという結果であった。「自分の生き方の尊重」では、「現在高群」「無関心群」「展望低群」に比べ、「展望高群」が高いという結果であった。「親の期待との折り合い」では、「展望低群」に比べ、「現在高群」「展望高群」が高いという結果であった。また、「親の期待への表面的な迎合」では、「展望高群」に比べ、「無関心群」「展望低群」が高いという結果であった。

Table 7 時間的展望の各グループにおける親の期待に対する反応様式の分散分析の結果

	1 現在高群 n = 42 27.8%	2 無関心群 n = 46 30.5%	3 展望高群 n = 38 25.2%	4 展望低群 n = 25 16.6%	F 値 df = (3,147)	多重比較
親の期待の積極的受容	3.28 (0.53)	3.29 (0.51)	3.17 (0.81)	3.20 (0.68)	0.35	
親の期待への反発・負担感	2.46 (0.68)	2.75 (0.68)	2.42 (0.90)	3.22 (0.58)	7.54***	4 > 1,3
自分の生き方の尊重	3.65 (0.63)	3.67 (0.42)	4.04 (0.50)	3.46 (0.58)	7.20***	3 > 1,2,4
親の期待への限界の認識	3.04 (0.38)	3.16 (0.25)	3.06 (0.47)	3.21 (0.30)	1.77	
親の期待との折り合い	3.84 (0.70)	3.62 (0.61)	3.99 (0.66)	3.26 (0.75)	6.69***	1,3 > 4
親の期待への表面的な迎合	2.64 (0.94)	2.83 (0.66)	2.27 (0.91)	3.01 (1.03)	4.43**	2,4 > 3

*** $p < .001$ ** $p < .01$

考 察

時間的展望体験尺度の検討

時間的展望体験尺度について探索的因子分析を行った結果、先行研究とは異なる因子構造が確認された。白井（1994）では「現在の充実感」、「目標指向性」、「過去受容」、「希望」の4つの因子が得られていたが、本研究においては「未来指向性」、「過去受容」、「現在充実」、「現実感」の4つの因子が得られた。

先行研究において、未来に関する項目として異なる側面をとらえているとされていた「目標指向性」と「希望」の2つの因子は、本研究においては「未来指向性」として1因子にまとまる結果となった。白井（1994）で見出された「目標指向性」と「希望」の2因子は、未来の次元に対して異なる側面を測定していることが確認されている一方で、「目標指向性」と「希望」は尺度間相関が高いということも指摘もされており、今回も目標指向性と希望は同一の側面としてとらえられたのではないかと考えられる。なお、「未来志向性」は「目標指向性」の到達した先に「希望」があると想定するならば、まだ未分化な状態であると考えられる一方で、「未来志向性」は「目標指向性」と「希望」の統合された状態と想定することも可能である。「未来志向性」という1因子となった背景については、今後、詳細な検討が必要であろう。

一方、先行研究において、現在の項目として見出されていた「現在の充実感」は、本研究では「現在充実」と「現実感」という2つの因子に分かれる結果となった。大学生にとって、現実的に行うべきことが多く日々の生活に現実感を抱いて生活しているということと、現在の生活に満足感や充実感を抱いて生活していることは異なる側面を有していることを示唆している。また、白井（1989）は、青年は過去・現在・未来のなかでも現在を最も重視する傾向があるという報告を行っている。これらのことから、青年において「現在充実」は、過ぎたことをくよくよせ

ず、先のことも心配しない、今ここにだけ集中する前後裁断という意味（白石，2005）や現在を精一杯大事に生きること、過去を生かし、未来を思うままにできる過未無体のような状況を志向していると考えられる。「現実感」は、地道な努力をせず自己充足的に自由を享受する姿勢を意味する、すなわち、今この身近な幸せを大事にする感性を捉えたコンサマトリーという概念で理解することも可能であろう。これらの解釈の是非についても、今後、詳細に検討すべき問題と考えられる。

時間的展望体験尺度のクラスター分析

過去・現在・未来に対して、調査対象者がどのような時間的特徴を持っているかをみるために時間的展望体験尺度に基づきクラスター分析を行った。その結果、「現在高群」、「無関心群」、「展望高群」、「展望低群」の4群が見出された。

「現在高群」は過去・現在・未来において、特に現在に対して肯定的な時間的展望をもっており、現在における「現在充実」、「現実感」のなかでも特に「現実感」を高く有していた。また、「現在高群」は過去・現在・未来に肯定的な時間的展望をもつ傾向にはあるものの、展望高群と比較すると、過去・未来に対する展望はそれほど肯定的ではないという特徴を持っていた。人数は52人と、4群中2番目に多かった。「現在高群」は、現在の実感や充実感を強く抱いており、また過去も比較的肯定的に受け入れてはいるものの、未来に対する目標や希望はあまり抱いていない。つまり、日々の生活の中で取り組むべきことに多く目が向いており、それに充実感を感じていることは、目の前のことに精一杯対応することで不確定要素の多い未来についてはあまり価値を置いていない状態と考えられる。

「無関心群」は過去・現在・未来のすべてに対して、展望低群ほど否定的ではないものの、過去・現在・未来のすべてに対してやや否定的な時間的展望を有しており、また、過去・現在・未来についての明確な特徴があまりみられなかった。人数は61人と、4群中最も多かった。日潟・齊藤（2007）でも、大学生において無関心群の人数は最も多く見出されており、本研究においても同様の結果がみられた。ここから、大学生において、時間的に意識をすることを先延ばししている者が少なくないということが考えられる。また、日潟・齊藤（2007）において、無関心群の大学生は精神的健康度が低いということも明らかにされていることから、「無関心群」は適応的でない可能性があると考えられる。

「展望高群」は過去・現在・未来のすべてに対して、肯定的な時間的展望を持っており、なかでも未来に対して肯定的な時間的展望を持っているという特徴を有していた。人数は47人と、4群中3番目に多かった。「展望高群」は過去を受容し、現在に充実感を感じ、未来に高い目標と希望を持っており、それらを統合している人であると予想される。つまり、過去を受容し、そこから現在の自分を確立しつつ、未来において自分がどのように進みたいか考え、希望を持って見通しを立てていると考えられる。

「展望低群」は過去・現在・未来のすべてに対して、否定的な時間的展望を持っており、なかでも未来に対して否定的な時間的展望を持っているという特徴を有していた。人数は37人と、4群中最も少なかった。「展望低群」は過去を受容しておらず、現在において充実感や現実感を持っておらず、また、未来に対しての目標や希望が特に低いことから、これまでの経験やこれ

からの見通し、現在の体験を踏まえた時間的な統合ができていないと考えられる。

期待を感じている割合についての検討

“あなたは、普段「こうあってほしい」あるいは「こうなってほしい」というように親から期待されているとどのくらい感じていますか”という質問に、「全く感じていない(1点)」、「どちらかといえば感じている(2点)」、「感じている(3点)」、「非常に感じている(4点)」の4件法で回答を求めた。親の期待を「全く感じていない」と回答した者は、男性では79名中23名(29.1%)、女性では118名中23名(19.5%)、全体では196名中46名(23.4%)であった。池田(2009)では、男性では103名中16名(15.5%)が、女性では118名中20名(16.9%)が、全体では221名中36名(16.3%)が親の期待を「全く感じていない」と回答しており、本研究と池田(2009)の結果を比較すると、本研究で「期待を全く感じていない」と回答する者の割合が多い。

また、親の期待を「非常に感じている」と回答した者は、男性では79人中3人(3.8%)、女性では117人中10人(8.5%)、全体では196名中13名(6.6%)であった。池田(2009)では、男性では103名中20名(19.4%)が、女性では118名中19名(16.1%)が、全体では221名中39名(17.6%)が親の期待を「非常に感じている」と回答しており、本研究と池田(2009)の結果を比較すると、本研究で「期待を非常に感じている」と回答する者の割合が大幅に少ない。

渡部・新井(2008)によると、現代は少子化が進み、親が子どもを自分と同一化し、子どもは一心に期待を背負わなければならないという状況がある一方で、子どもに関して無関心で全く期待をしないという親も増加しているという。このように、社会状況や子育てに対する親の意識の変化、教育に対する価値観の多様化などが今回の結果につながった一つの要因なのではないかと考えられる。また、今回の調査対象者の所属学部が目的学部とされる教員養成学部であったため、進路に対する考えが親と一致している者や、すでに進路の目標を持ち自己を確立している者が少なくない可能性のあることも、親の期待を感じていない者が増加した要因の一つではないかと考えられる。

親の期待に対する反応様式尺度の検討

親の期待に対する反応様式尺度について探索的因子分析をおこなった結果、先行研究とは異なる構造が確認された。池田(2009)においては、「親の期待の積極的受容」、「親の期待への反発」、「親の期待との折り合い」、「自分の生き方の尊重」、「親の期待の軽視」、「親の期待への表面的な迎合」、「親の期待に応えることへの限界の認識」、「親の期待による負担感」の8つの下位尺度が得られているが、本研究においては、「親の期待の積極的受容」、「親の期待への反発・負担感」、「自分の生き方の尊重」、「親の期待への限界の認識」、「親の期待との折り合い」、「親の期待への表面的な迎合」の6つの下位尺度が得られた。池田(2009)で見出された「親の期待への反発」、「親の期待による負担感」の2因子は、本研究においては「親の期待への反発・負担感」として1因子にまとまるという結果となった。これは、期待に対する反発と負担感を親の期待に対するネガティブな反応として同一の側面からとらえているためではないかと考えられる。また、「親の期待の軽視」の因子は、本研究では「親の期待への反発・負担感」や「親の期待への限界の認識」の2つの因子に含まれる結果になった。親の期待を軽く受け取るとい

うことが反発を表すことを意味したり、無理として限界の認識を意味したりすることに変容したと考えられる。

時間的展望の各グループにおける親の期待に対する反応様式の検討

時間的展望体験尺度の下位尺度得点を標準化した得点に基づき分類した4クラスターを独立変数、親の期待に対する反応様式尺度を従属変数として分散分析を行ったところ、「親の期待への反発・負担感」、「自分の生き方の尊重」、「親の期待との折り合い」、「親の期待への表面的な迎合」において主効果が見られた。そこで多重比較（Tukey法）を行った結果、「親の期待への反発・負担感」においては、「現在高群」、「展望高群」に比べ、「展望低群」が反発や負担感を高く示していた（Figure 2）。一方、「親の期待との折り合い」においては、「展望低群」に比べ、「現在高群」、「展望高群」が親の期待との折り合いを高く示していた（Figure 3）。

過去・現在・未来のすべてに対してネガティブな態度を有している「展望低群」は、期待に対して反発・負担感を強く感じており、親の期待に折り合いをつけられていないということが明らかとなった。それに対して、過去を受容し現在に対してポジティブな展望を有している「現在高群」や、過去・現在・未来を統合しポジティブな展望を有している「展望高群」は、親の期待に対して反発・負担感は弱く、また、親の期待に折り合いをつけていることが明らかとなった。富澤（2005）は、親から心理的に独立していない段階においては、親の期待から影響を受け負担感に影響するが、親から心理的に独立している段階においては、期待からの影響を受けず負担感への影響も見られないということを明らかにしている。また、池田（2009）では、「アイデンティティの感覚が確かであるほど、親の期待に対して負担感や反発を示す程度は小さくなり、自分の生き方を尊重する」ということを明らかにしている。これらのことから、「展望低群」は、親からの心理的独立が不十分で自己を確立していないため、親からの期待に折り合いをつけることができず、親の期待に対して反発や負担感を高く感じているのではないかと考えられる。それに対して「現在高群」「展望高群」は、親からの心理的独立を達成し自己が確立できているために、親からの期待に折り合いをつけることができ、期待からの影響も少なく、親の期待への反発や負担感も低いのではないかと考えられる。

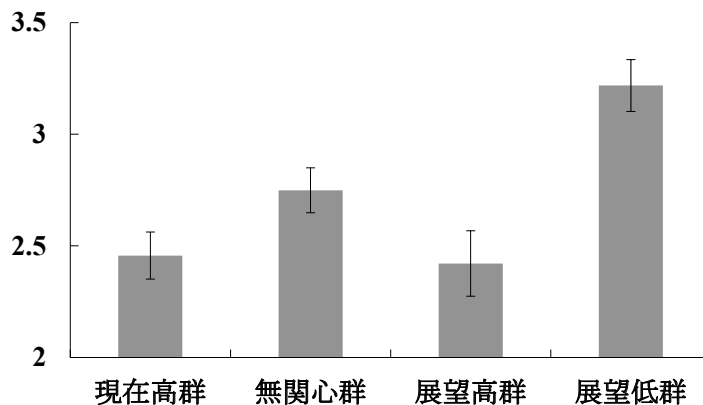


Figure 2 親の期待への反発・負担感得点の平均値と標準誤差

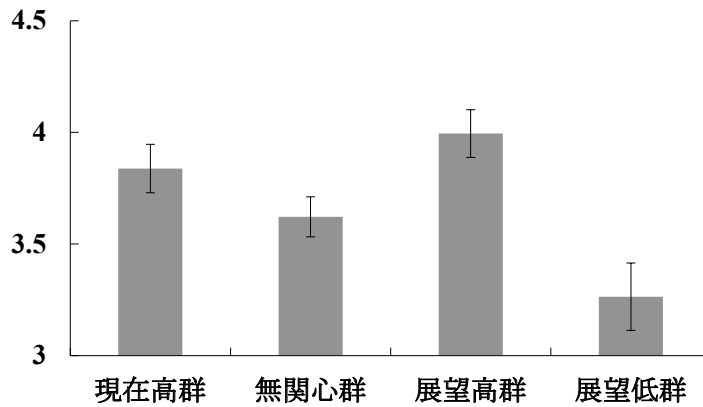


Figure 3 親の期待との折り合い得点の平均値と標準誤差

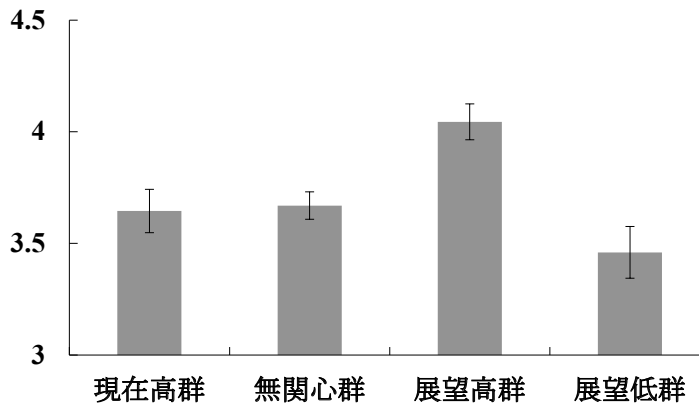


Figure 4 自分の生き方の尊重得点の平均値と標準誤差

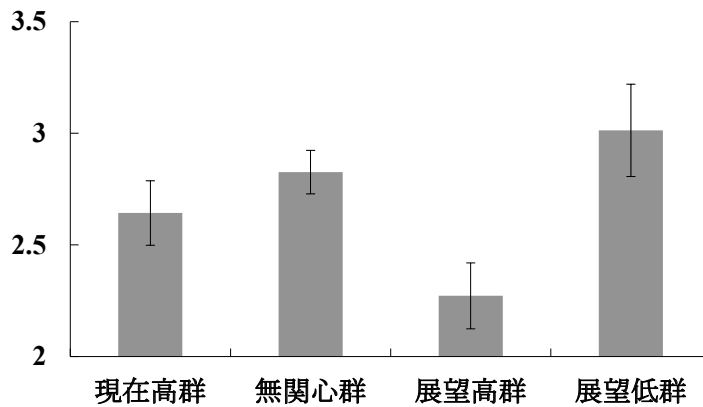


Figure 5 親の期待への表面的な迎合得点の平均値と標準誤差

「自分の生き方の尊重」においては、「現在高群」「無関心群」「展望低群」に比べ、「展望高群」が高いという結果であった (Figure 4)。このことから、「展望高群」は「現在高群」, 「無関心群」, 「展望低群」に比べ、自分らしい生き方を送ることができるという自信を高く持っている可能性が示唆された。過去・現在・未来を統合し、ポジティブな時間的展望を有している展望高群は、自分の生き方を尊重しているということが明らかとなり、池田 (2009) の研究を支持する結果となったといえよう。

「親の期待への表面的な迎合」では、「展望高群」に比べ、「無関心群」, 「展望低群」が高いという結果であった (Figure 5)。このことから、「無関心群」, 「展望低群」は「展望高群」に比べ、親の期待に表面的には沿った生き方を選択しているということが示唆された。「展望高群」は自己の生き方を尊重し、親との考えに対しても折り合いを付けられることから、期待に表面的に迎合することは低いという結果になったのではないかと考えられる。一方、「無関心群」, 「展望低群」は自分の生き方をあまり尊重できていないことから、期待への表面的な迎合につながったのではないかと考えられる。

今後の課題・展望

今回の研究では、親の期待について、期待を感じる領域を限定せずに、全般的な親の期待に対する反応様式を検討した。しかし、期待を感じる領域については、「社会的スキルの習得」, 「就職・学業期待」, 「学校への適応」といった複数の領域があることや、両親による「就職・学業期待」は、青年の自覚している期待達成度や親子関係にかかわらず青年の負担感と正に関連すること (富澤, 2005) などが明らかにされている。このように、期待を感じる領域や期待に関する認知はそれぞれ異なることが明らかにされているため、今後は、親からの期待を感じる領域を限定し、時間的展望と期待に対する反応様式について詳細な検討を行うことが課題の一つではないかと考えられる。

また、今回の研究では、親から感じる期待について、父親と母親の区別は行わずに期待に対する反応様式を検討した。しかし、母親からの期待および期待に対する反応様式が父親のそれとは異なるという報告もあるため (春日・宇都宮・サトウ, 2014)、今後は、父親から感じる期待と母親から感じる期待をそれぞれ分けたいうえで検討することも必要ではないかと考えられる。

さらに、社会の急激な変化に伴う先行き不透明な現況にあって、若い世代を中心に拡がりつつあるコンサマトリー的な価値観が時間的展望に及ぼす影響を考慮し、親からの期待の持つ意味を検討することも必要であろう。茂木 (2022) の〈生きがい〉とは、自分にとって意味がある、人生の喜びを発見し、定義し、楽しむということにつきるという指摘も視野に入れた親の期待の影響に関して再考する試みも重要であろう。

要約

本研究では、大学生の時間的展望を明らかにし、時間的展望と親の期待に対する反応様式と

の関係について明らかにすることを目的とした。対象は大学生197名であった。大学生における時間的展望の特徴を明らかにするため、クラスター分析を行った結果、現在高群、無関心群、展望高群、展望低群の4つの群が見出された。また、親の期待について、期待を感じているかという質問に対し、期待を感じていると回答した者は197名中151名(76.6%)、期待を感じていないと回答した者は197名中46名(23.4%)という結果であった。

親から期待を感じていると回答した者について、時間的展望における4群と親の期待の反応様式について検討した。その結果、過去・現在・未来に対してバランスよく肯定的な態度を示す展望高群では、「親の期待への反発・負担感」、「親の期待への表面的な迎合」は低く、「自分の生き方の尊重」、「親の期待との折り合い」は高かった。一方、過去・現在・未来に対してすべてに否定的な態度を示す展望低群では、「自分の生き方の尊重」、「親の期待との折り合い」は低く、「親の期待への反発・負担感」、「親の期待への表面的な迎合」は高いという対照的な結果となった。また、現在に対して肯定的な態度を示す現在高群では、「親の期待との折り合い」は高く、「親の期待への反発・負担感」と「自分の生き方の尊重」は低かった。また、時間的展望での特徴があまりみられなかった無関心群では、「自分の生き方の尊重」は低い一方、「親の期待への表面的な迎合」が高く、期待に対して迎合的であることがうかがえた。

なお、今後の課題としては、期待を感じる領域を限定し、期待に対する反応様式について詳細な検討を行うことと、父親から感じる期待と母親から感じる期待をそれぞれ分けたうえで検討すること、さらには価値観の変容や生きがいという観点から時間的展望を再考し、親の期待に対する反応様式を検討することが必要であろうと考えられた。

引用文献

- 日潟淳子・齊藤誠一(2007). 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 18, 109-119.
- 日潟淳子(2008). 高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討-時間的態度と精神的健康との関連から- 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1, 11-16.
- 池田幸恭(2009). 大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係 青年心理学研究, 21, 1-16.
- 石川茜恵(2011). 大学生の時間的展望と他者の影響の認識の関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 20, 111.
- 春日秀朗・宇都宮博(2011). 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響-子どもの期待に対する反応様式に注目して- 立命館人間科学研究, 22, 45-55.
- 春日秀朗・宇都宮博・サトウタツヤ(2014). 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響:期待に対する反応様式に注目して 発達心理学研究, 25, 121-132.
- 河村照美(2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究, 4, 101-110.

- 小高 恵 (1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究
教育心理学研究, 46, 333-342.
- Lewin, K. (1979). 社会科学における場の理論(猪股佐登留, 訳). 誠信書房. (Lewin, K. (1948)
Field theory in social science (Cartwright, D. Ed.) New York: Harper.)
- 茂木健一郎 (2022). 生きがいー世界が驚く日本人の幸せの秘訣ー (恩蔵絢子, 訳). 新潮社.
- 長峰伸治 (2003). 親との葛藤から見たフリーターー複数の事例による検討 現代のエスプリ,
427, 105-115.
- 仲野好重・桜本和也 (2005). 親子関係における期待と青年期のアイデンティティ形成の相互
性について 大手前大学社会文化学部論集, 6, 111-126.
- 嶋野重行・菅原正和・大波瑠夏 (2003). 時間的展望 (Temporal Perspective) が向社会的行
動に与える影響 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 2, 133-140.
- 白井利明 (1989). 現代青年の時間的展望の構造(1)ー大学生と専門学校生を対象にー 大阪教
育大学紀要IV, 教育科学, 38, 21-28.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 白石 豊 (2005). 心を鍛える言葉. 日本放送出版協会.
- 杉村和美 (2001). 関係性の視点から見た女子青年のアイデンティティ探究: 2年間の変化とそ
の要因 発達心理学研究, 12, 87-98.
- 庄司知明・藤田尚文 (2000). 子どもから見た親の期待についてー親子関係診断尺度 (EICA)
との関連からー 高知大学教育学部研究報告第2部, 59, 55-68.
- 谷 冬彦 (2014). 自我・アイデンティティの発達 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・
白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック 福村出
版 pp.127-137.
- 富澤麻美 (2005). 青年期における親の期待とその負担感に関する研究ー大学生・専門学生を
対象にー 人間科学研究, 18, 35.
- 富安浩樹 (1997). 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究,
45, 329-336.
- 都筑 学 (1999). 大学生の時間的展望ー構造モデルの心理学的検討ー 中央大学出版部.
- 都筑 学・白井利明 (2007). 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版.
- 都筑 学 (2014). 時間的展望 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明・平石賢二・
佐藤有耕・若松養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック 福村出版 pp. 210-220.
- 植之原薫 (1993). 同一性地位達成過程における『事象の記憶』の働き 発達心理学研究, 4,
154-161.
- 渡部雪子・新井邦二郎 (2008). 親の期待研究の動向と展望 筑波大学心理学研究, 36, 75-83.

参考文献

- Crystal, D. S. Chen, C. Fuligni, A. J. Stevenson, H. W. Hsu, C. C. Ko, H. J. Kitamura, S.
& Kimura, S. (1994). Psychological Maladjustment and Academic Achievement: A

- Cross-Cultural Study of Japanese, Chinese, and American High School Students. *Child development*, 65, 738-753.
- Frank,L.K. (1939). Time perspective. *Journal of Philosophy*, 4, 293-312.
- 古市憲寿 (2011). 絶望の国の幸福な若者たち. 講談社.
- 比嘉麻美子・高良美樹・岡本祐子 (2005). 「意味ある他者」の存在と大学生の未来展望との関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 4, 78-89.
- 伊藤忠弘 (2009). 大学生の親子関係の認知からの期待・プレッシャー経験－他者志向的動機づけを規定する要因の予備的分析－青山心理学研究, 9, 11-22.
- 笠原 嘉 (1976). 今日の青年期精神病理像 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 (編) 青年の精神病理1 弘文堂 pp. 3-27.
- 柏木恵子 (2008). 子どもが育つ条件－家族心理学から考える 岩波書店.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法－創造性開発のために 中央公論社.
- 河村照美 (2002). 大学生における親からの期待に関する研究－面接・動的家族画をめぐって－ 家族心理学研究, 16, 95-107.
- Lewin,K. (1954). 社会的葛藤の解決 (末永俊郎, 訳). 創元社. (Lewin, K. (1948). *Revolutionary social conflict: Selected papers on group dynamics*. New York:Harper.)
- 溝上慎一 (2002). 大学生論－戦後大学生論の系譜をふまえて ナカニシヤ出版.
- 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へ 有斐閣.
- 奥田雄一郎 (2008). 大学生の時間的展望の構造に関する研究－過去・現在・未来の満足度の相対的關係に着目して 共愛学園前橋国際大学論集, 8, 13-22.
- 佐藤裕樹・岡本祐子 (2010). 大学生におけるアイデンティティの確立と時間的展望－TAT物語にみられる時間的統合の観点から 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 9, 54-66.
- 白井利明 (2003). 青年期の心理とフリーター 現代のエスプリ, 427, 116-126.
- 谷 冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9, 35-44.
- 都筑 学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 頼住光子 (2014). 正法眼蔵入門. 角川学芸出版.

謝 辞

本研究の調査を進めるにあたりましては、鹿児島大学の学生のみなさんに多大なるご協力をいただきました。厚く感謝して、ここにお礼申し上げます。